

長野県富士見町の墨書・刻書土器

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松, 隆史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3556

長野県富士見町の墨書・刻書土器

小松 隆 史

1 はじめに

広大な八ヶ岳の裾野。その西南麓に富士見町は位置する。縄文中期の遺跡群が稠密に存在することで有名な山麓部に、縄文集落に重なるようにして平安期の集落が展開している。その数は現在確認されているだけで 59 箇所（図 1）。しかし、未開発の山林が存在することを考えれば、その数は今後さらに増加するのは確実だろう。それは、八ヶ岳の山麓において、縄文期の遺跡に次ぐ数である。

弥生時代以降、この地はおよそ千年の間、人が住まない荒野となるが、その空白期において、この山麓に姿を見せたのは、朝廷直轄の牧に係わる人々であったと推測されている。彼らは鎌や刀子などいくらかの鉄製品をもち、土師器や須恵器、灰釉陶器を使って、竪穴住居に寝起きをする生活をしてきた。そしてその住居は、縄文の民の生活場所とほぼ重なる尾根の緩斜面に、一定の間隔を置いて営まれていた。

そんな彼らが遺したもののなかに、墨書・刻書と呼ばれる文字資料がある。もともと土壌の酸性度が高い山麓においては、木簡など有機質の遺物は遺らないために、土器に書かれた文字は、資料として大変重要である。それゆえ先学も集成、研究を重ねてきたのだが^①、昭和 48 年に中央自動車道建設に先立つ調査で、町内の足場遺跡が発掘され、その時点で長野県内では最多となる 83 点（破片含め）の墨書土器が出土し、注目された^②。

その後、県内でも墨書土器の出土量は増加しているが、町内でもここ十数年来で十箇所ほどの平安期の遺跡が調査され、墨書・刻書土器について、新たな知見を得るに至っている。この小論ではこれらをまとめ、現時点での課題を提示することにした。しかし資料には未整理・未報告のものも多く、全ての墨書・刻書や、その絶対数、詳細な出土状況を示すことができない点、お許し願いたい。

2 富士見町の平安集落

前述のとおり、富士見町域では平成 18 年末現在で 59 箇所の平安期の遺跡が確認されている。その他にも土師器や須恵器の破片が採集されている地点は数箇所あり、山林など未踏査の地域を勘案すればさらに数十箇所は集落が埋もれている可能性はあろう。

富士見町は現在の国道 20 号線が抜けるフォッサマグナの谷を挟んで東北の八ヶ岳山麓部と西南の入笠・釜無山麓部に大きく二分される。当然ながら両者は斜面の傾斜方向も 180 度異なるうえ、地質もまったく異なっている。遺跡はそのどちらにも存在するが、多くは八ヶ岳の広大な山麓部の、痩せた尾根の緩斜面に営まれている。また今回は触れないが、古代の製鉄遺跡や山砂鉄の採取地とされる場所があり、これらの遺跡との関連性について、検討すべき課題は多い。八ヶ岳の山麓側で最高所の遺跡は標高 1160m を超え、低いところでは 740m ほどである。

以下、墨書・刻書土器を出土した遺跡について、東から概略をまとめる。なおいずれも、平安時代後期の集落である。

(1) 東原遺跡（図 2）

平成 3 年調査。標高約 890m。住居址 9 軒。尾根の南向き斜面に住居址が並ぶ。

(2) 森遺跡（図 3）

平成2年調査。標高約840m。住居址3軒。東原遺跡の西南約600mに位置する。西南向き斜面に並ぶ。調査区外にも広がっていると思われる。

(3) 小森遺跡 (図4)

平成5年調査。標高約870m。住居址37軒。東原遺跡の西方約300mに位置する。西南～南向きの緩斜面に展開し、掘立柱建物址を伴う。東原・森・小森と狭い範囲に集中する集落のなかでも、中心的な存在であろう。

(4) 坂平遺跡 (図5)

平成8年調査。標高約740m。住居址7軒。西南向き扇状地に住居址が並ぶ。

(5) 夏焼遺跡 (図6)

平成14年調査。標高約740m。坂平遺跡の西北1.5kmに位置する。東南向きの緩斜面に住居址1軒を発掘したが、集落は調査区の西北方へ広がっていると考えられる。

(6) 中尾遺跡 (北地区) (図7)

平安期の遺構は平成6年に調査。標高約920m。住居址24軒。東北から西南に長い痩せ尾根の、東南向きの斜面に住居址が並ぶ。

(7) 机原三本松遺跡 (図8)

平成8年調査。標高約920m。住居址10軒。中尾遺跡とは母沢川の谷を挟んで隣接する。東南向き斜面に住居址が並ぶ。

(8) 足場遺跡 (図9)

昭和48年調査。標高約980m。住居址14軒。机原三本松遺跡の北方1.2kmに位置する。周辺には足場南、蟻久保といった土師器・灰釉陶器などが採集されている遺跡が存在する。尾根が湾のようになった南向き斜面に住居址が並ぶ。

(9) 机原遺跡 (図10)

昭和55年調査。標高約890m。住居址2軒が東南向きの斜面に重なっていた。机原三本松遺跡の西方500mに位置する。

(10) 砂原遺跡 (図11)

昭和58年調査。標高約930m。中世村落跡だが、平安の住居址が1軒が発見されている。

3 各遺跡の墨書・刻書土器

多くの遺跡が整理途上であるため、詳細が明らかでない資料が多いが、各遺跡から出土した墨書・刻書土器について、紹介する⁽³⁾ (表)。

(1) 東原遺跡

2号住居址から「三」が、大型の6号住居址から「田」と「女」が出土している。「田」と「女」はいずれも山梨県北巨摩の旧明野村(現北杜市)の梅之木遺跡から出土している⁽⁴⁾。

(2) 森遺跡

2号住居址から平仮名の「ち」と読める文字が出土している。これは後述する中尾遺跡からもまとめて出土しているが、この時代の、この地域の土器に平仮名が墨書されているものは例がないため、何か別の文字であろう。山梨県斐崎市の宮ノ前遺跡では、よく似た雰囲気「万」が出土している⁽⁵⁾。あるいはこの万が記号のように誤認されたものかもしれない。もう一点は記号のようであるが、長野県茅野市高部遺跡や天狗山遺跡の例と比較して、「丸」の崩れたものである可能性が高い⁽⁶⁾。

(3) 小森遺跡

4・36・37号住居址から「生」が、6号住居址からは「王」が出土している。大型の37号住居址にまとまって「生」の字があるのは興味深い。変わったものでは10号住居址の甲斐型埴の底に「川上」と書かれたものがあり、また15号住居址には記号のようなものがある。

(4) 坂平遺跡⁽⁷⁾

1号住居址から「岑」が4点出土している。これは1.5km離れた夏焼遺跡でも出土しているが、梅之木遺跡のほか旧高根町（現北杜市）の湯沢遺跡からも出土しているという⁽⁸⁾。

ほかに2号住居址では、「井」あるいは「口」ともとれる墨書・刻書がまとまって出土している。これもまた、山梨県に同例がある。6号住居址のものは、墨書の上からなぞって線刻されており、手法としても梅之木遺跡の資料と共通している。

(5) 夏焼遺跡⁽⁹⁾

1号住居址から「千」とともに「岑」がまとまって出土している。本址は調査区のはずれに位置し、おそらく夏焼の平安集落のはずれの住居であったと推察される。小鍛冶遺構を伴う住居であった。

(6) 中尾遺跡（北地区）

1号住居址の「十」、9号住居址の「五」といった数字の他に、森遺跡でも出土していた「ち」がまとまって出土している。整理途上のため本稿ではその詳細を示すことができないが、11・12号住居址を中心に、破片も含めると相当な点数が出土している。11号住居址は24軒の集落の内で最大の住居で、遺物も豊富であった。

(7) 机原三本松遺跡

6号住居址から「大」「介」と判読不明な文字が、また「木」とも読める刻書が10号住居址から出土している。

(8) 足場遺跡

足場遺跡からは、85点（うち2点は表採資料⁽¹⁰⁾）におよぶ資料が出土している。なかでも最大の8号住居址から破片もあわせて56点が出土し、そのほとんどが「八十」ないしはその断片「八」か「十」である。

遺跡全体でみても「八十」「八」「十」が抽んで多く、「足」「本」が1点ずつ、読解不能なものが1点混じるのみである。「八十」とされるもののうち、多くは内黒の埴に書かれているが、これらのほとんどが器に対して逆位に書かれている。「足」と甲斐型土器に書かれた「本」は、器に対して正位で書かれており、その違いは歴然としている。

(9) 机原遺跡

本遺跡では「十」を二つ連ねたような文字「十十」が出土している。欠損しているため、あるいは何かの文字の一部かもしれない。

(10) 砂原遺跡

砂原遺跡はバラエティに富んだ資料がみられる。足場遺跡にもあった「八十」や「本」のほか、小森遺跡にみられた「生」あるいは「王」の可能性のある破片。そのほかに「之」や、則天文字のような解読不能な文字がある。

詳細が明らかでない資料も含まれているが、このような各遺跡の資料から、おおよそ次のような傾向を見いだすことができる。

① 遺跡ごとに多く出土する文字にはまとまりがある。

たとえば小森遺跡の「生」、足場遺跡の「八十」、中尾遺跡の「ち」、夏焼遺跡と坂平遺跡の「岑」のような資料をあげることができる。

② 墨書土器をある程度の量保有する住居は、集落の中でも比較的大型の住居址である。

東原6号、森2号、小森37号、坂平1号、同2号、夏焼1号、中尾11号、同12号、足場8号が該当する。

③ 墨書土器を保有する住居址は、集落の中で距離を置いている。

東原2号と6号、机原三本松の6号と10号がこれに該当する。さらに、小森4・6号、同10・15号、36・37号や、坂平1・2号、5・6号というように、はなれて対になっている例もある。

さらに土器そのものに目を向けてみる。土師器は「内黒」と「甲斐型」の2つに大別される。「内黒」というのは、土器の内面に炭素（煤）を吸着させ磨き上げたもので、文字通り内面が黒く光沢を帯びている。山梨県方面では俗に信州タイプともよばれ、長野県側に多く分布する。もう一方は「甲斐型」といわれる、山梨方面に分布の中心をもつ土器群である。「甲信」境を接する富士見町域では、この2者が共存している。墨書が書かれる土器も、どちらかといえば「内黒」が多いが、「甲斐型」の比率も決して低くない。

そして本稿で扱う土器は、数例を除いて多少の差はあるが、おおむね10世紀後半に位置づけられる。そのなかで、墨書土器については以下のような点が注意される。

- ① 底部に墨書のあるものはすべて甲斐型の皿である。
- ② 甲斐型の皿や碗の墨書は、器に対して正位である比率が高い。
- ③ 逆に、「内黒」の皿や碗の墨書は、器に対して逆位である比率が高い。
- ④ 「岑」は、「内黒」・「甲斐型」を問わず、器に対して正位で書かれている。

つまり、「内黒」という長野県側に多く出土する土器群と、「甲斐型」と呼ばれる山梨県側に中心をもつ土器群では、墨書のあり方に差があると見ることができる。

その一方で、坂平遺跡の資料が全て「内黒」の碗に書かれているのに対して、夏焼遺跡では全て「甲斐型」の碗に書かれている。同じ「岑」をもつ梅之木遺跡の48号住居址例は、「甲斐型」でありながら「内黒」の碗で、「岑」の刻書が器に対して正位に、墨書が逆位に記されている。文字と器の関係を考える上で興味深い資料である⁽¹¹⁾（図12）。

これはまったく勝手な憶測だが、「岑」は甲斐型土器の保有者にとって器に対して正位で書かれるべき文字であって、坂平遺跡においてはその性格が強く反映された結果、内黒碗に正位で書かれ、文字を器に対して逆位に書くことが多かった内黒土器の保有者の視点から、梅之木遺跡の土器は逆位で書かれているのではないかと考えるのは、少々乱暴というものだろうか。

4 隣接地との関連について

まず書かれている文字には、山梨県側の「岑」「井」「生」「本」などとともに、長野県側の「井」「大」「本」など、共通するものがみとめられた。一般的によく用いられている文字も含めて、これは当時、八ヶ岳の南麓から西麓にかけて広く展開していたと考えられる「柏前の牧」の広がりなどからみても、相応の人の交流があったことが考えられ、納得することができる⁽¹²⁾。

しかし文字の意味については、十分な考察ができるものではなかった。ただ「ち」が本来いかなる字であったのか、今後の類例の増加を待つとともに、ご教示を仰ぎたいと考えている。

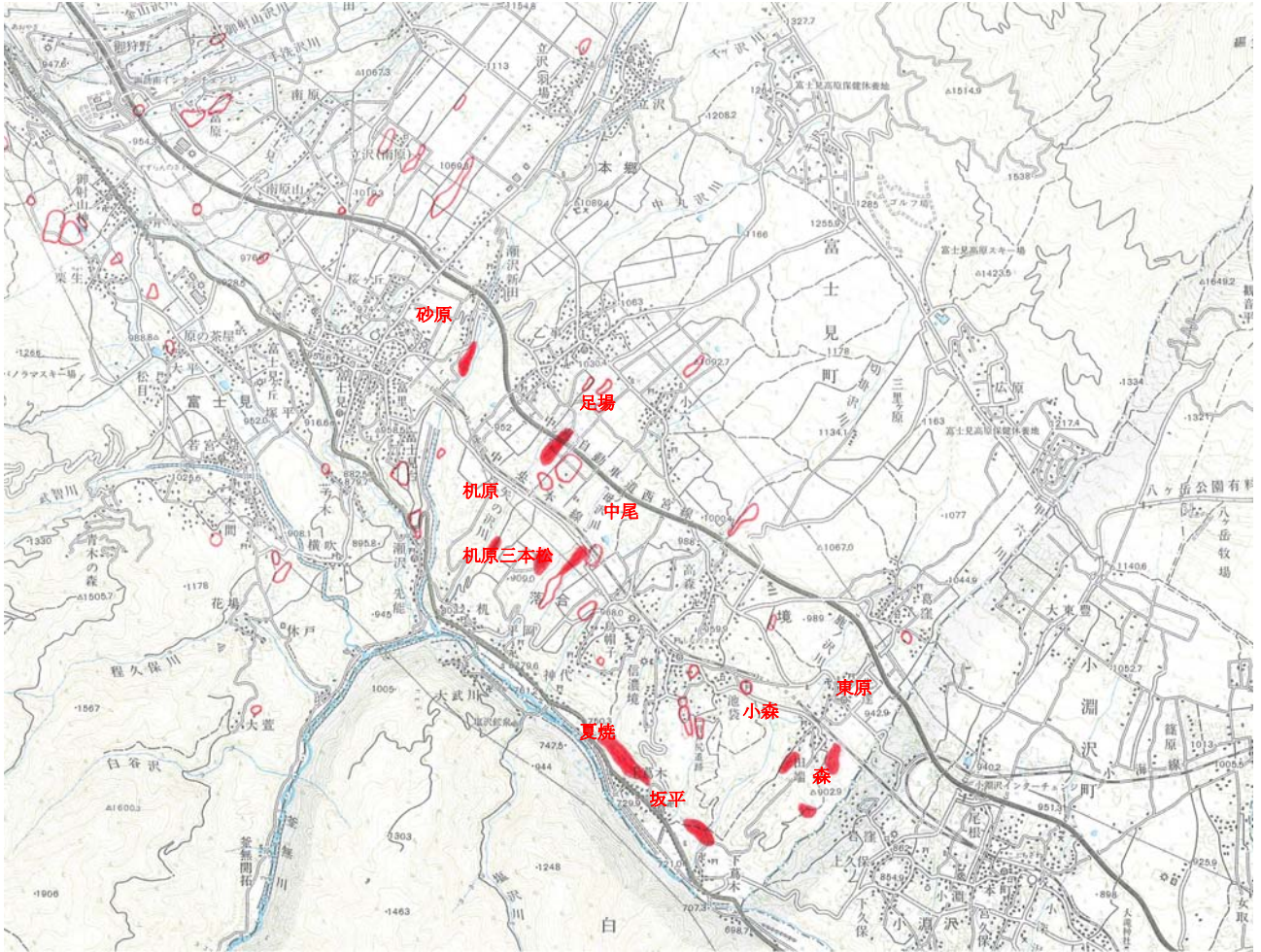
いっぽう、「甲斐型」と「内黒」が混在し、そのいずれにも墨書がみとめられる八ヶ岳の南麓においては、より詳細な観察と分析をおこなうことで、地域的な特色とともに、墨書の意味を知るなんらかの手掛かりが得られるのではないかと期待できるだろう。

5 おわりに

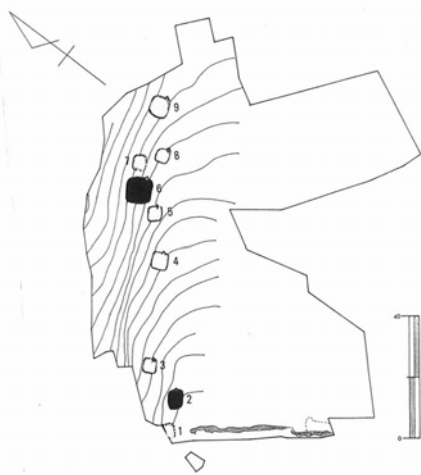
八ヶ岳の山麓に平安集落が展開したのは、9世紀後半と10世紀後半の大きく二時期であることが知られている⁽¹³⁾。その限られた時間のなかで墨書・刻書土器は、人々がどのように活動していたのかを知る、一つの手掛かりになるのではないだろうか。地域間の大きな動きとともに、集落内での変遷や住居間の関係などを描き出すかもしれない。いずれにしても本稿では詳細な検討などを行うことができず、ただ箱の中身をぶちまけたところで終わってしまった。いずれ報告などをまとめる際に、しっかりしたものを示すことができれば、と考えている。

註

- (1) 岡田正彦 1973「墨書・刻書土器小考—長野県下出土例を中心として—」『信濃』第25巻4号
同 上 1978「信濃の墨書・刻書土器」『中部高地の考古学』長野県考古学会、など
- (2) 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪郡富士見町内その1—』1973 長野県教育委員会
- (3) 表を文末に付したが、図は一部のものの紹介にとどめる。図番号は表の番号を参照されたい。
- (4) 『梅之木遺跡 I』2002 山梨県明野村教育委員会
- (5) 『宮ノ前遺跡』1992 韮崎市遺跡調査会 韮崎市教育委員会
- (6) 『高部遺跡』1983 茅野市教育委員会
『天狗山遺跡』1993 茅野市教育委員会
- (7) 『坂平』2004 長野県富士見町教育委員会
- (8) 前掲書 註(4)
- (9) 『夏焼遺跡』2003 長野県富士見町教育委員会
- (10) 平出一治 1975「長野県富士見町足場遺跡出土の土器」『長野県考古学会誌』21
- (11) 前掲書 註(4)
- (12) 『富士見町史』上巻 1991 長野県富士見町教育委員会
- (13) 柳川英司 2001「第IV章 結語」『大田菟遺跡』茅野市教育委員会



第1図 富士見町域の平安時代の遺跡



第2図 東原遺跡

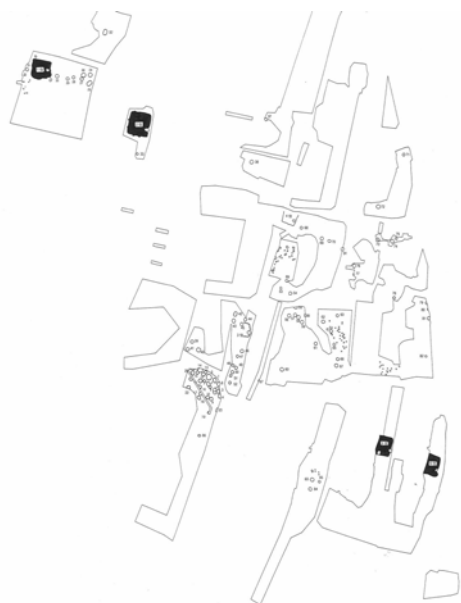


第3図 森遺跡

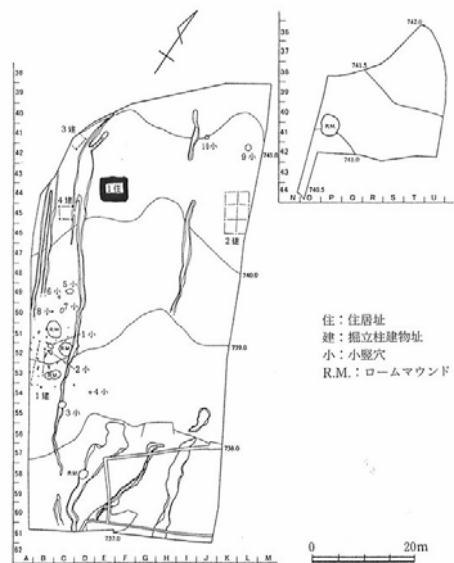


第4図 小森遺跡

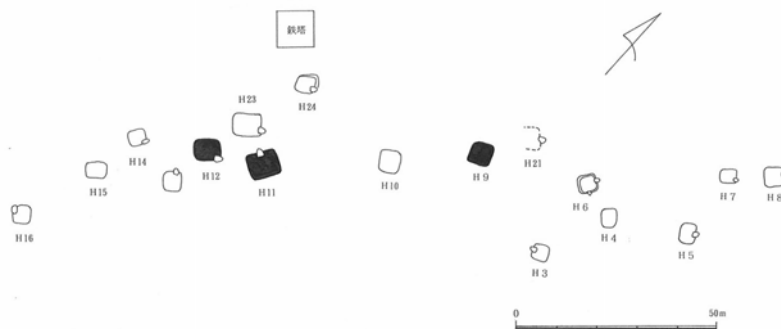
※ 黒塗りの住居址は墨書・刻書土器出土住居址



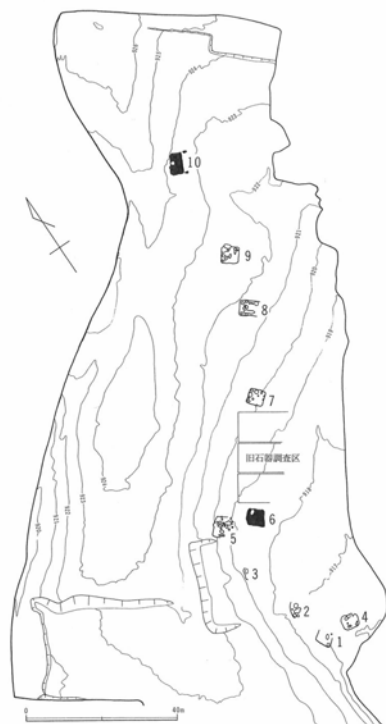
第5図 坂平遺跡



第6図 夏焼遺跡



第7図 中尾遺跡



第8図 机原三本松遺跡

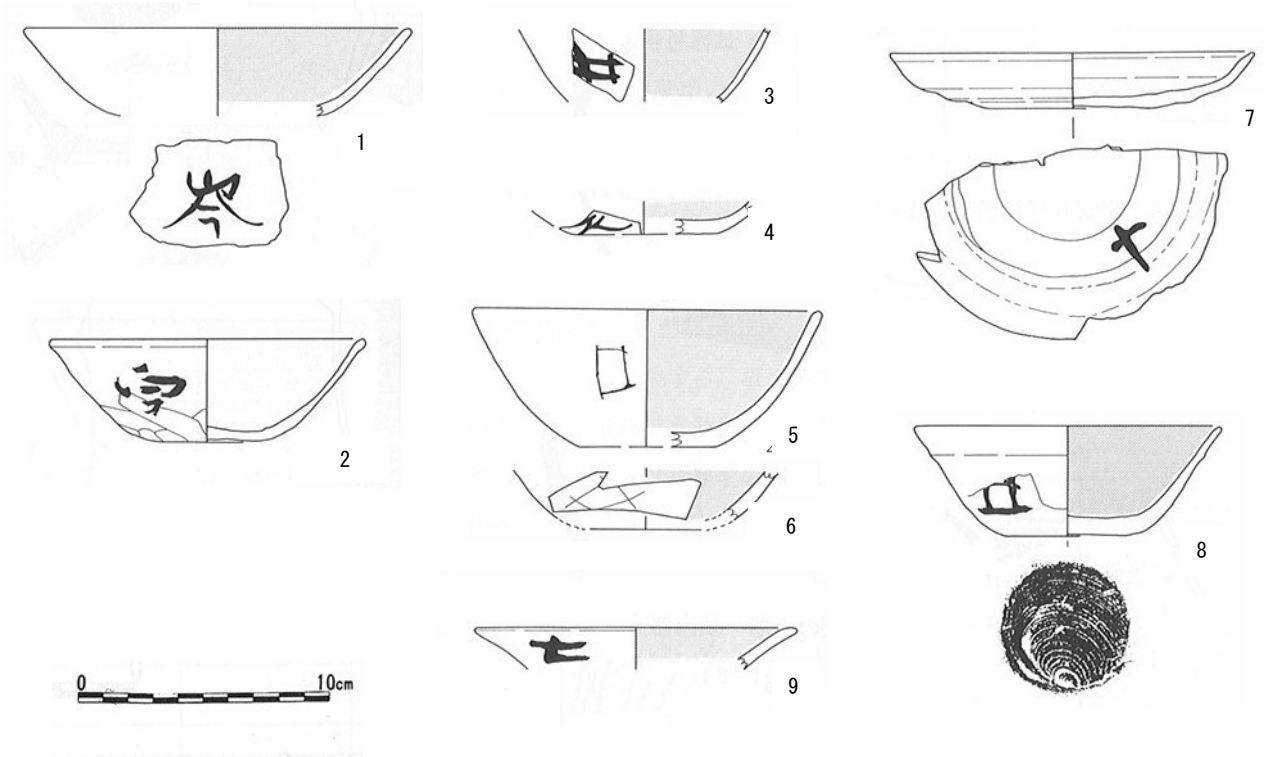


第10図 机原遺跡第

第9図 足場遺跡

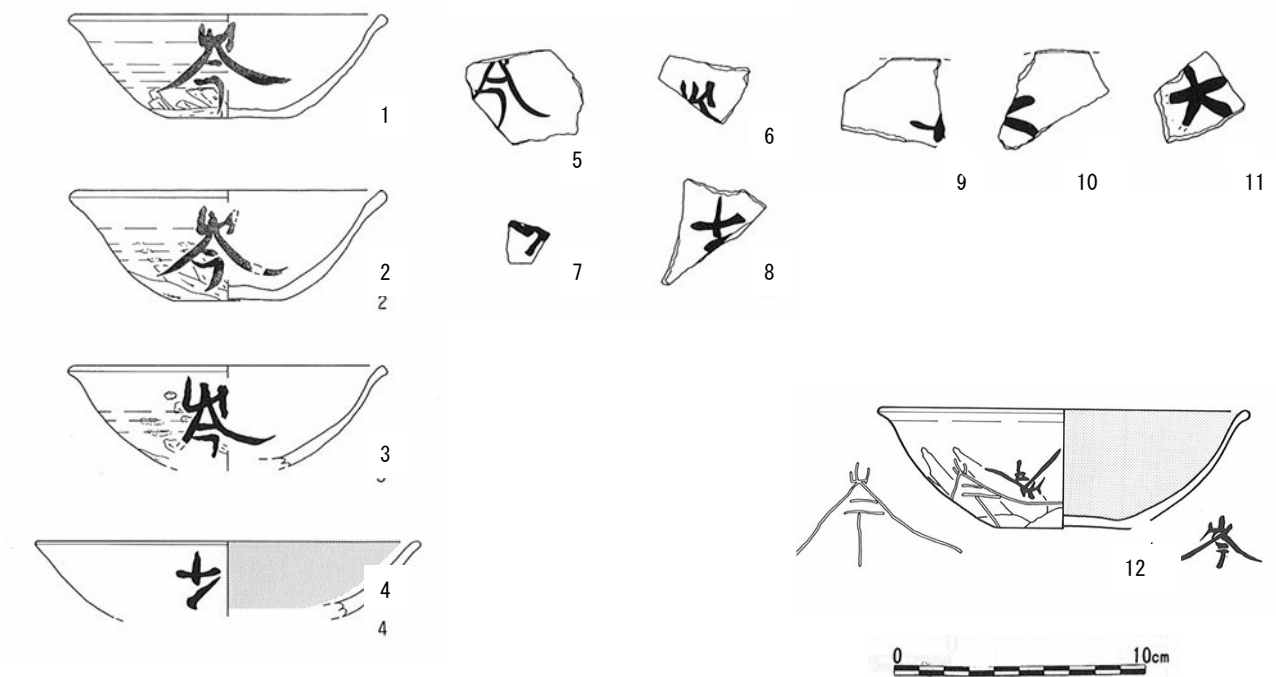
11図 砂原遺跡

※ 黒塗りの住居址は墨書・刻書土器出土住居址



第12図 坂平遺跡の墨書・刻書土器

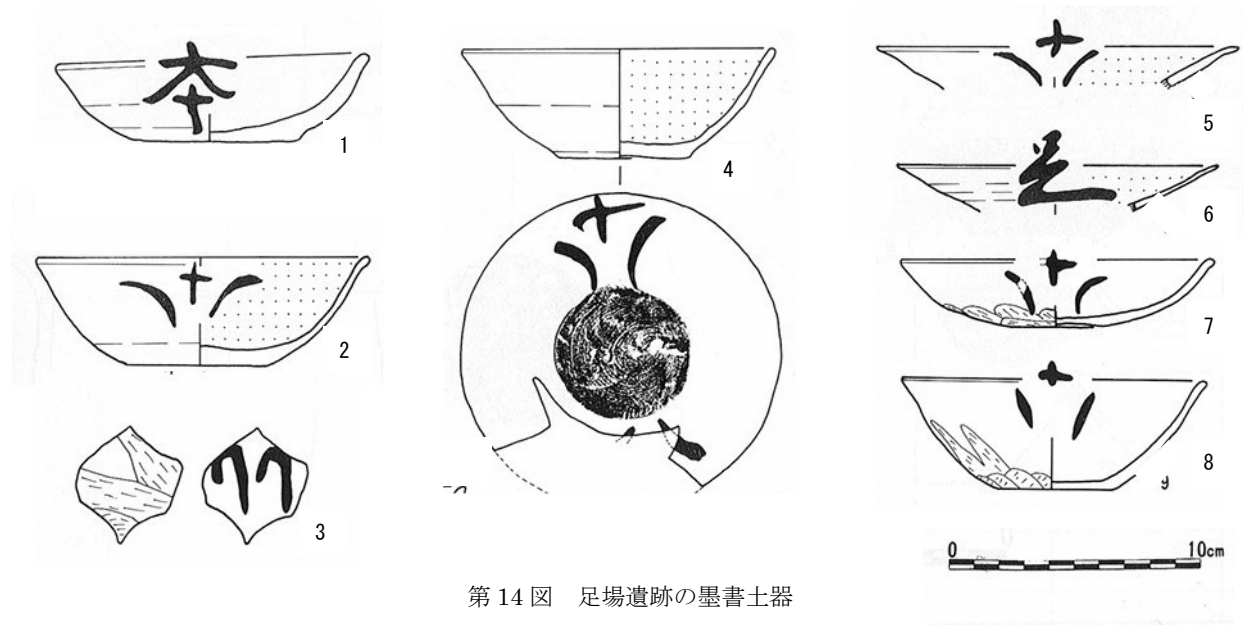
信州大学考古学研究所報告 第10号 1997



第13図 夏焼遺跡の墨書土器

12: 梅之木遺跡 48号住居址出土

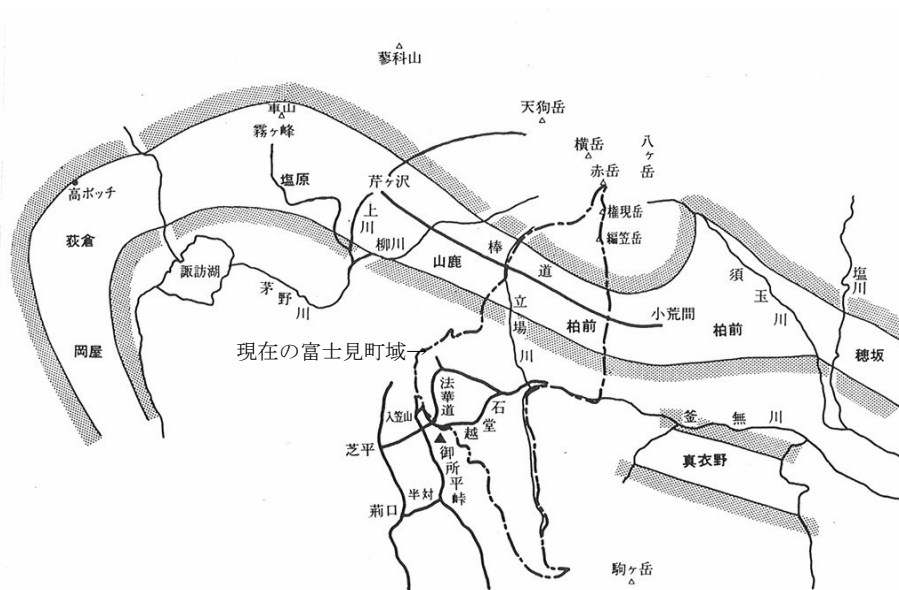
信州大学考古学研究所報告 第10号 1997



第14図 足場遺跡の墨書土器



第15図 森遺跡、中尾遺跡の墨書土器（写真）



第16図 北巨摩郡を中心とする諸牧の想定概念図

番号	遺跡名	遺構名	文字	種別	文字の向き	位置	土器の種類	器種
	東原	2号住居址	三	墨書		体	土師器	埴
	東原	6号住居址	田	墨書		体	土師器	埴
	東原	6号住居址	女	墨書		体	土師器	埴
15図1	森	2号住居址	ち	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	皿
15図2	森	2号住居址	ル	墨書	逆	体	土師器 (甲斐型)	皿
	小森	4号住居址	生	墨書		体	土師器 (内黒)	埴
	小森	6号住居址	王	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	
	小森	10号住居址	川上	墨書		底	土師器 (甲斐型)	
	小森	15号住居址	㍑	墨書		底	土師器	埴
	小森	26号住居址	?	墨書		体	灰釉陶器	
	小森	36号住居址	生	墨書		体	土師器	埴
	小森	36号住居址	生?王?	墨書		体	土師器	埴
	小森	37号住居址	生	墨書		体	土師器	埴
	小森	37号住居址	生	墨書		体	土師器	埴
	小森	37号住居址	生	墨書		体	土師器	埴
	小森	37号住居址	生	墨書		体	土師器	埴
	小森	37号住居址	生	墨書		体	土師器	埴
12図1	坂平	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
12図2	坂平	1号住居址	宇?	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
	坂平	1号住居址	?	墨書	?	体?	土師器 (内黒)	埴
12図3	坂平	2号住居址	井	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	2号住居址	井?	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	2号住居址	井?	墨書	正?	体	土師器 (内黒)	埴
12図4	坂平	2号住居址	冢?	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	2号住居址	?	墨書		底	土師器 (甲斐型・内黒)	皿
12図7	坂平	5号住居址	十	墨書		底	土師器 (甲斐型)	皿
	坂平	5号住居址	水?	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
12図8	坂平	6号住居址	井?	墨+刻書	正	体	土師器 (内黒)	埴
12図9	坂平	遺構外	七	墨書	正	体	土師器 (内黒)	皿
	坂平	2号住居址	井?□?	刻書		体	土師器 (内黒)	埴
12図5	坂平	2号住居址	井?□?	刻書		体	土師器 (内黒)	埴
12図6	坂平	2号住居址	井	刻書	斜	体	土師器 (内黒)	埴
	坂平	2号住居址	L字形	刻書		体	土師器 (甲斐型・内黒)	皿
	坂平	6号住居址	L字形	刻書		体	土師器 (内黒)	皿

13図1	夏 焼	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
13図2	夏 焼	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
13図3	夏 焼	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
13図4	夏 焼	1号住居址	千	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
13図5	夏 焼	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
13図6	夏 焼	1号住居址	岑	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
13図7	夏 焼	1号住居址	?	墨書		体	土師器 (甲斐型)	埴
13図8	夏 焼	1号住居址	千	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
13図9	夏 焼	遺構外	千?十?	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
13図10	夏 焼	遺構外	大?	墨書	正?	体	土師器 (内黒)	埴
13図11	夏 焼	遺構外	大	墨書	正	体	土師器 (内黒)	埴
15図3	中 尾 (北地区)	1号住居址	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	中 尾 (北地区)	9号住居址	五	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	
	中 尾 (北地区)	11号住居址	ち	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	皿
	中 尾 (北地区)	11・12号住居址他	ち	墨書			土師器	
	中 尾 (北地区)	遺構外	久	墨書		体	土師器	
	机原三本松	6号住居址	全	墨書		体	土師器	
	机原三本松	6号住居址	大	墨書		体	土師器	
	机原三本松	6号住居址	介	墨書		体	土師器	
	机原三本松	10号住居址	木?	刻書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	1号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	1号住居址	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	1号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	1号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	1号住居址	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
14図1	足 場	3号住居址	本	墨書	正	体	土師器 (甲斐型)	埴
	足 場	3号住居址	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
14図2	足 場	5号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	5号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
14図3	足 場	5号住居址	ㇿ	墨書		体	土師器 (甲斐型)	埴
	足 場	7号住居址	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足 場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴

	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	十	刻書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	8号住居址	八十	刻書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
14図7	足場	12号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (甲斐型)	埴
14図8	足場	12号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (甲斐型)	埴
	足場	12号住居址	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	皿
	足場	14号住居址	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	竪穴状遺構	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	皿
	足場	竪穴状遺構	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	竪穴状遺構	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	皿
	足場	その他	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	八十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	十	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	八	墨書	逆	体	土師器 (内黒)	埴
	足場	その他	(不明)	墨書		体	土師器 (内黒)	埴
	机原		十	墨書		体	土師器	
	砂原		本	墨書		体	土師器	
	砂原		入	墨書		体	土師器	
	砂原		生?王?	墨書		体	土師器	
	砂原		和	墨書		体	土師器	
	砂原		八十	墨書		体	土師器	
	砂原		八	墨書		体	土師器	
	砂原		十	墨書		体	土師器	
	砂原		之	墨書		体	土師器	